

氏名（平出 千晴）

### 患者に寄り添う姿勢の大切さ

私は、成人看護学実習Ⅱの回復期実習でA氏と出会った。

A氏は、区役所に行く途中で倒れて救急搬送され、右被殻出血と診断された。左片麻痺や左側の半側空間無視、理解力・記銘力の低下が見られた。受け持ち当初、学生が話しかけても、A氏は開眼することはなく周りのことにも関心がない様子だった。そのため、私はA氏とどのように関わっていいのかわからなかった。最初は、学生が賞賛の声をかけても、身体の変化に対して関心がない様な返答をしていた。しかし、自分の足で歩ける距離が長くなると、賞賛の声かけに対して「そうですか？」や「今日はできるようになりました」など、嬉しそうな表情で返答するようになり、日に日に笑顔が増えていくことが私にとっても嬉しかった。さらに、次第にA氏の表情も明るくなり、A氏自身から、「トイレでしたい」「お湯につかりたい」など意欲的な発言が聞かれるようになった。A氏は、車椅子移動の際は、自分の足でこいでいたのだが、A氏はスリッパでは滑り、上手く前に進むことが出来なかった。その時に、「スリッパじゃ上手く進めないね…娘が持ってきてくれればいいんだけどね…」と話した。A氏は、家族環境が複雑なためキーパーソンがおらず、入院に必要なものが揃わないなど、意欲的なA氏の思いが阻害されていた。また、面会時間になるとホールで過ごしたり、布団に包まって丸くなって寝ている様子が見られ、私は、A氏のこの行動は、他患者と家族と一緒に過ごす様子を見ないようにするためではないかと感じた。そこで、A氏がスリッパでも生活できるようにし、スリッパが脱げにくいように工夫することにした。まず、スリッパにゴムをつけ、裏に滑り止めのシートを貼り付け、足のサイズに調節できるようにマジックテープを付けてA氏に渡した。A氏は大変喜び、何度も何度も学生に頭を下げてお礼を言った。次の日にスリッパを見ると裏が既に真っ黒になっており、A氏が履いてくれていたと思うと実感し、とても嬉しくなった。

実習終了後、先生からA氏と話した内容を聞いた。A氏は、麻痺が残り、1人であるため、人生がどうしてもよくなり、このまま死んでもいいと考えていたという。しかし、学生が様々な看護をしてくれたこと、毎日リハビリを応援してくれたことに、大変感謝していたそうだ。そして、これから頑張って生きようと考えられるようになったと話していたと聞いた。麻痺という障害を一生抱えることになった患者にとって、障害の受容には家族の存在が大きい。しかし、患者の中にはA氏のように家族などの身寄りのない方がいる。その環境の中で、看護者として自分に何が出来るのか考えた時に、患者に寄り添う姿勢が大切であると学んだ。私が実感したように、看護に込めた想いは絶対に患者に届く。そのことを教えてくれたA氏に深く感謝し、この学びをこれからの看護人生に活かしていきたい。